東海道二川宿

豊橋市二川宿本陣資料館
ワークシート No.4

二川宿の成立

東海道二川宿は二川と大岩の2村からなる宿場で、江戸時代以前には、それぞれ梅田川南の本郷の地にありました。二川は天正13年(1585)に、大岩は天正11年(1583)にそれぞれ本郷から元屋敷の地に移ったと伝えられ、慶長6年(1601)徳川家康により東海道に宿場が設置されたときには12町(約1.3km)ほど離れた距離にありましたが、2村で1つの宿場として人馬継立を行ないました。しかし、はなれた場所では人馬継立に不都合もあり、正保元年(1644)に両村は現在地に移転して町続きとなり、二川と加宿大岩からなる宿場町となりました。

二川と加宿大岩

二川と加宿大岩はそれぞれ独立した村で、宿場町であるとともに田畑を耕し年貢を納める農村でもありました。加宿とは宿場で常備すべき人馬が少ない場合に不足する人馬をおぎなう村や町のことです。二川と加宿大岩は100人・100疋の常備伝馬を50人・50疋ずつ等分に負担していました。

宿場の規模は小さく、天保14年(1843)の記録では、二川と加宿大岩を含めて、人口では53宿中42番目、家数で41番目、旅籠屋数では36番目でした。
記録の残る江戸時代後半の両村の家数・人口が右の表です。寛政2年頃には天明の飢饉などの影響で人口家数とも減少していますが、その後、次第に増加していきます。

項目 / 年号(西暦)	二川		大岩		合計	
	家数(軒)	人口(人)	家数(軒)	人口(人)	家数(軒)	人口(人)
安永9年(1780)	170	635	129	522	299	1,157
寛政2年(1790)	163	626	109	449	272	1,075
享和2年(1802)	181	724	110	412	291	1,136
文政3年(1820)	194	799	112	490	306	1,289
天保3年(1832)	207	843	135	570	342	1,413
天保9年(1838)	202	889	128	617	330	1,506
嘉永3年(1850)	203	885	129	596	332	1,481
文久元年(1861)	204	799	142	641	346	1,440
明治元年(1868)	200	801	140	564	340	1,365

二川宿の人々の商売

二川・大岩の人々の職業を幕末慶応3年(1867)の記録からまとめたものが右の表です。

本陣や旅籠屋のほかにも多くの職業があることが分かりますが、大部分は農業との兼業で、しかも宿場の中の人々を相手にするだけの小規模な商いだったようです。

職業	二川	大岩
本陣	1	―
脇本陣	1	―
旅籠屋	25	―
商人宿	―	1
茶屋	2	2
飴茶屋	―	3
飴菓子店	6	―
米屋	5	―
穀屋	―	3
醤油屋	1	―
味噌屋	2	―
豆腐屋	―	1
魚屋	2	―
質屋	5	2
酒小売店	2	―

職業	二川	大岩
居酒屋	3	3
荒物店	2	―
小売物店	4	―
湯屋	2	1
髪結床	2	1
家大工	2	3
左官	2	―
瓦屋	―	1
畳屋	―	1
鍵屋	1	―
紺屋	―	1
薬種店	―	1
草履草鞋店	―	1
水車稼	1	2

二川宿関連略年表

年号(西暦)	事　　項
天正11年(1583)	大岩が本郷より元屋敷へ移転する。
天正13年(1585)	二川が本郷より元屋敷へ移転する。
慶長６年(1601)	東海道二川宿が設置され、伝馬36疋の常備を命じられる。
慶長９年(1604)	二川と大岩で検地が行なわれる。
寛永９年(1632)	二川と大岩が幕府領から吉田藩領となる。
寛永15年(1638)	東海道の宿場の常備伝馬が、人足100人･馬100疋に改められる。
寛永20年(1643)	二川と大岩が吉田藩領から幕府領となる。
正保元年(1644)	二川と大岩が元屋敷の地から現在地に移転し、一続きの町並みとなる。この頃より大岩が二川宿の加宿となる。
天和元年(1681)	二川と大岩が幕府領より鳥羽藩領となる。
元禄７年(1694)	助郷の組替えが行なわれ、二川宿は定助郷12か村･大助郷16か村の合計28か村が指定される。
元禄10年(1697)	この年から宝永４年まで、岡山藩主池田綱政が絵馬･黄金燈篭等を岩屋観音堂へ寄進する。
宝永４年(1707)	大地震により大津波が起きる。
正徳元年(1711)	伝馬賃銭が改定される。(元賃銭)
享保10年(1725)	助郷の組替えと共に定助郷と大助郷の区別がなくなり、二川宿の助郷は25か村となる。 二川と大岩が鳥羽藩領より幕府領となる。
享保20年(1735)	二川宿で大火が起こり、本陣後藤五左衛門家をはじめ58軒が焼失する。
延享元年(1744)	八名郡賀茂村が助郷として追加指定され幕末まで勤める。
宝暦３年(1753)	二川宿で大火が起こり、本陣後藤家をはじめ229軒が焼失する。
明和２年(1765)	江戸下谷講中により岩屋山頂に聖観音立像(通称、岩屋観音)が建立される。
天明４年(1784)	二川宿と助郷村との間で人馬勤め方に付いて争いが起きる。
寛政２年(1790)	二川･大岩に1か所ずつ計2か所あった問屋場が1か所となる。
寛政５年(1793)	二川宿で大火が起こり、本陣後藤家はじめ90軒を焼失する。後藤家に代わり紅林権左衛門家が二川宿2代目の本陣となる。
寛政６年(1794)	二川宿の助郷が、人馬勤め方について道中奉行に訴訟を起こす。
寛政10年(1798)	山本南圭･紅林一隠等、二川宿の俳人が十王院境内に芭蕉句碑(紫陽花塚)を建立する。
文化３年(1806)	二川宿で大火が起こり、本陣紅林家はじめ63軒が焼失する。
文化４年(1807)	馬場彦十郎が本陣職を継ぎ、二川宿3代目の本陣となる。
文化９年(1812)	１か所に統合されていた問屋場が、再び二川･大岩にそれぞれ設置される。
文化11年(1814)	二川宿と助郷村との間で人馬勤め方に付いて争いが起きる。
文化12年(1815)	岩屋観音堂境内に古市木朶の句碑が建立される。
天保２年(1831)	二川宿と助郷村の代表が道中奉行に向こう20年間の代助郷願いを提出するも却下される。
天保４年(1833)	二川宿の助郷が助郷休役を願い道中奉行に駕籠訴を行なうも却下される。 二川宿に増助郷4か村が指定される。天保11年(1840)まで。
天保７年(1836)	二川宿に増助郷7か村が追加指定される。天保11年(1840)まで。
天保12年(1841)	碧海･加茂両郡で二川宿に宿附助郷28か村が指定される。嘉永3年(1850)まで。
嘉永７年(1854)	大地震により二川宿本陣はじめ、宿内が大被害をこうむる。
文久３年(1863)	14代将軍徳川家茂が上洛の途中、二川宿本陣で小休する。
慶応元年(1865)	14代将軍徳川家茂が長州征伐のため上洛の途中、二川宿本陣で昼休する。
明治元年(1868)	明治新政府の宿駅制度改革により二川宿の助郷が236か村となる。 問屋場を伝馬所と改称、伝馬取締役を置く。二川と大岩が三河県の管轄となる。
明治２年(1869)	二川と大岩が静岡藩(後に静岡県)の管轄となる。
明治３年(1870)	本陣と脇本陣が廃止される。伝馬所が1か所に統合される。
明治４年(1871)	二川と大岩が額田県の管轄となる。二川に陸運会社が設立され、のち陸運元会社に加入する。
明治５年(1872)	伝馬所と助郷が廃止される。二川と大岩が愛知県の管轄となる。